

秋季公開講演会要旨

仏教經典現代語訳の諸問題

本学教授
文学博士 桜部 建

近時、仏教經典の現代語訳がしきりに試みられ、その成果が続々と刊行されている。そしてそれは、一般に、読書階層にかなり歓迎されているらしいから、そこに確かに、現代社会の要求に応えるという意味がある、と言えよう。これは「經典」にとってももちろんたいへん重要なことである。が、いま、そのような社会の要望への対応ということを別とすると、經典を現代語訳するという作業は、仏教研究の進展の上でも、また一つの大きな意味をもつ、と考えられる。經典を古い言葉の呪縛から解放することが、研究者の層を厚くし研究の裾野を押し広げることによって、文献学的研究や教理学的研究にのみいちじるしく偏っている従来の仏教学に、新しい研究分野の展望を開くことは確かだからである。

ところで仏教經典現代語訳の作業の前には無数の問題が横わっている。ここでは大乘經典の場合に限定して、その問題のいくつかを摘記して見よう。

(1) 原典からということ。——一般に漢訳・チベット訳などか

らの重訳でなくて「原典」からの直接の訳が望まれるのは尤もなことである。しかし原本の存在は限られている。そこで、原本の欠けている經典の場合、その性質から「準梵語原典」と見做されるところのチベット訳本を用いれば、近似的な「原典からの訳」を得るとされる。このことは厳密な手続きと周到な配慮があれば確かにかなりな程度に可能である。だが、現存する梵語「原典」からの訳、あるいは梵本が現存しないためにチベット訳本による近似的な「原典からの訳」が、どの程度その經典の *Utext* の形態を代表するであろうか。校刊されている梵語テキストの素材となった写本類は少数の例外を除けばかなり後代のものである。チベット訳本もおおむね八世紀を廻らない。かえて初期の漢訳經典の方がしばしば遙かに古い形態を留めている。ある經典の原初の姿に迫るということはけっして容易な仕業でなく、時に諸本の綿密な対照による鋭い洞察を必要とする。そしてさらに、仮に満足すべき手続きによって能うかぎり原初の形に近いテキストを求め得たとしても、発生的な意味において原初的な形態が果してその經典の最も生命力を發揮した形態であるかどうかということ、もう一つ別の問題である。時代的に廻れば廻るほど「純粋」であり従って經典として価値が高いのであり、時代が降れば降るほど夾雑物が多くその經典の本来性から遠ざかるのであるとは、けっしていちがいには言えることでないからである。

(2) 厳密なこと。——第一に底本とすべき刊本の不確かさの問題があり、第二に極めて重要な用語についてすらなお存する語義の不明確性の問題がある。前者については、マニユスクリ

プトの蒐集とその厳正な解説の作業がさらに少しでも多く積み重ねられることと、エジャートン文典などをさらに補正してゆくことと、が要求されるであらう。後者については、諸経のいちいちに用語の精細なコンコードダンスを作ることが必要である。近來、論書については梵・藏・漢のずいぶん精密な索引がいくつも出されて、語の用法や語義の確認に新しい大きな進展が見られた。經典についても入楞伽經(鈴木)・般若經(コンゼ)・迦葉品(ヴェラー)・金光明經(ノーベル)などの業績はあるが、なお甚だ十分と言つてよい。長谷岡氏の入法界品語彙などの公けにされる日を期待する。

(3) 読み易いということ。——読み易さが欠ければ、經典現代語訳の意義の大きな部分が失われることになる。しかし、一つの言語で書かれたものを正しく理解することと、それを他の言語で平明に表現することは、必ずしもあい伴わない。訳の厳密さと読み易さとは補充するよりもむしろ競合する。次に、既成の漢訳語のとり扱いの問題がある。その語感是他をもって換えがたいとする考え方と、逆にほとんどそれを忌避するように見える考え方が、現に在存する。卑見は、その範囲を厳しく限定し、そのかぎりにおいて、積極的に漢訳語を活用すべきものとする。特に重要な仏教用語がただ現代語の形に改められることによつて、読者によるその正しい理解はおおいに促進されると思われぬ。また、さらに、耳で聞く経と眼で読む経との違いに思いを致す要がある。阿含經典のみならず大乘經典も、本来、口で誦せられたものを耳で聞くべきをその本質として、成立していると考えられ

る。しかるにこんにちの現代語訳經典は文字に書かれたものを眼で読むべく提供される。そのギャップは、ことに「厳密な」そして「読み易い」訳を目指すとき、看過し得るものではない。

(4) 選択の問題。——数百篇にのぼる大乘經典の中から、いづれを選んでその現代語訳を出だすかという選択については、シナ仏教以来の教相判釈や、平安・鎌倉時代以後の日本仏教諸宗の立場から、はっきり脱却して、その視点を定めることを必要とする。それらを離れて、經典をそれぞれその本来の土壌に返して見直すという考え方に立たなければ、經典を「現代に生かす」ということもその研究分野に「新しい展望を開く」ということも、不可能であらうと思われる。

謙敬聞奉行

本學助教 白井元成

現代社会は情報化社会であるとか、知識産業社会であるとか、或いは脱工業社会、乃至は人間関係断絶の時代であるなど、種々なる表現をもつて語られなければならないほどに、極めて複雑不可解にして混迷せる時代である。しかるにその混迷の根源を尋ね求めるとき、実にそれは合理的精神によつて齟らされた、人間至上主義によるものといつても、けつして過言ではない。まことに、すべてを自己中心的に考え、一切を合理的に理解しようとする